２０２３年度　神戸山手女子高等学校　１次　入学試験

国　語

・試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。

・試験時間は 50 分です。

・解答用紙は、この問題冊子の中央にはさまれています。

・試験のはじめに、受験番号を解答用紙に記入しなさい。
（氏名を書いてはいけません。）

・解答用紙の □ の採点欄には、何も書いてはいけません。

・解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。

・字数制限のある問いでは、句読点や記号も一字と数えます。

・質問などがあれば、静かに手をあげて知らせなさい。

受 験 番 号			

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

もちろん「何を言っているのか、よくわからないだけの文章」を書いても誰も読んではくれません。逆に「何を言っているのか、すらすらわかる文章」を書いても、誰も二度と読み返そうとは思いません。

わからないけれど、何か心に響く。「たしかに、そうだ」と腑に落ちるのだけれど、どこがどう腑に落ちたのかをはっきりとは言うことができない。だから、繰り返し読む。

①そういう文章が読者の中に強く深く浸透する文章なのです。

どうして、そういう文章が読者に強く、深く触れるかというと、そこに読者に対する信頼があるからです。

信頼されている、あるいは解釈を委ねられているという※1負託の感覚を読者が覚えるからです。

そういう文章は、読み手が主体的に踏み込んでゆかない限り、生気づいてこない。

「主体的な踏み込み」というのは、ことばを換えて言えば、読者の側の「錯覚」であり、「誤読」であり、ひどいときには「関係妄想」に類するものです。

でも、②それでいいんです。

（中略）

私の思いをどう解釈するか、どう評価するか、それをあなたに委ねますという、いささか悲愴な断念を告げながら、それにもかかわらず、できたらこちらの意のあるところを汲んで、それなりのご評価を頂きたい……と、あれこれ言い換えたり、単語を組み替えたりしてみせる。

（中略）

「自分の言いたいことを、きちんとことばにする」という条件が必ずしもコミュニケーションにとって本質的なことではない、ということがおわかりいただけたでしょうか？　その語の真の意味において「よい文章」というのは、誤読する自由、誤解する権利を読み手に確保しておいてくれる文章の方なのです。

【　A　】、みなさんがここまでの話にうっかりうなずいてしまうと、話はさらに複雑になってきます。

誤読を許容するというのは、言い換えると、「私はこの文章の意味がすみずみまで理解できた」という読者の傲慢が許容されないということです。誤読を許容する文章というのは、実は誤読しか許容しない

文章なんです。

当然ですね？　X　、誰か（評論家とか文学研究者とかが）、「私はこの作家のこの文章の意味をすみずみまで理解できた」と主張して、その解釈が「正しい」ということに世間が合意してしまったら、それ以後の読者たちには「　　」がもうなくなってしまいますから。だから、コミュニケーションにおいては、「一般解」というものが存在することが許されないのです。

世に③「古典」や「名作」として読み継がれている書物には ⓐ膨大な解説書や研究書が献じられています。どうして、解説書や研究書がたくさん書かれるかというと、「読むとすごくおもしろいんだけれど、よくよく考えると、何が書いてあるのかよくわからない」からです。

古典といわれるほどの書物は、小説であれ哲学書であれ、読者に「すみからすみまで理解できた」と Y 言わせないような謎めいた※2パッセージを含んでいます。これはもう必ずそうです。構造的にそうなんです。

「謎めいたパッセージ」というのは、必ずしも読んだ人がそろって「おおお、これは謎めいている」と合意するようなものではありません。【　B　】、ほとんどの人がすらすらと読み飛ばしてしまうような箇所に、ふと足を止めて「ちょっと、待ってね。どうしてここで、こんなことばが出てくるの？　変じゃない？……」というふうにいぶかしむ人が ⓑグウゼン発見するものです。

極端な話、「どうしてこの本には、このことばが使われていないのか？」という問い方だってあるわけです。

『白銀号事件』で④シャーロック・ホームズは、「どうして事件の晩には、この出来事が起こらなかったのか？」という ⓒスイリの仕方をします。ホームズに倣（なら）えば、「そこにないもの」を謎にすることだってできるわけです。

【　C　】、一冊の書物に蔵されている可能性のある「謎」は原理的には無限ということです。一冊の本が蔵している「謎」は読者の数だけあります。

読者の数と言っても、読者ひとりで謎一個というわけではありません。

同じ人が読んでも、子ども時代に読んだときと、大人になってから読んだのでは、本の様相はまるで違ってきます。「ああ、この本は『こんなこと』が書

いてある本だったのか、子どものときには気づかなかったなあ」ということが、よくあります。子どものときには見落としていたことに大人になってから気づくこともありますし、その逆だってあります。失恋する前と後では違いますし、結婚したり、就職したり、子どもができたり、病気をしたり、親しい人が死んだり……といろいろな出来事が私たちには起こりますが、その前後では必ず同一の書物が読者に示す「謎」は変わってきます。

⑤読者ひとりにおいてさえ、謎を発見する機会は、原理的には無限にあるわけです。

（内田 樹（たつる）「先生はえらい」より一部改変）

※1 負託……人に引き受けさせて任せること。

※2 パッセージ…文章の一節。

問一 ═線ⓐ～ⓒについて、漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して書きなさい。

問二 ═線①「そういう文章が読者の中に強く深く浸透する文章なのです」とありますが、

Ⅰ 「そういう文章」とはどのような文章なのですか、二十五字以内で答えなさい。

Ⅱ なぜⅠの文章が「読者の中に強く深く浸透する」のですか、その理由が書かれている部分を本文から十三字で抜き出しなさい。

問三 ═線②「それでいいんです」とありますが、どういうことですか。その説明としてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ 何を言っているのかよく分からない文章しか書けなくても、書き手の熱意が伝わればいい。

い 何を言っているのかすらすら分かる文章が良い文章であると、誤解されてもよい。

う 主体的な読み手によって、書かれた内容が書き手の意図以上の良い作品になってもよい。

え 書かれた文章の内容が生気づくので、「錯覚」・「誤読」をしてもよい。

問四 【 A 】～【 C 】に入る言葉を、次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

あ つまり　**い** しかし　**う** あるいは　**え** むしろ

問五 X ・ Y に入れるのに、ふさわしい副詞を、次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

あ 決して　**い** たいして　**う** もし　**え** いささか

問六 □ に入る言葉を、本文から六字で抜き出しなさい。

問七 ――線③「『古典』や『名作』」、④「シャーロック・ホームズ」とありますが、この二つの例が共通するのはどのようなことですか。その説明としてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ 謎めいているものの魅力的で、解説書や研究書が多く書かれ、解釈がわかれていること。

い ミステリアスで、謎を解くことに人々を次々と引き入れていく魅力があること。

う 魅力的ではあるが、何が書かれているのかわからずいつかは忘れられ消えていくこと。

え 何気ないところに疑問を感じ、そこにないものも謎にできるように、無限に謎はできること。

問八 ――線⑤「読者ひとりにおいてさえ、謎を発見する機会は、原理的には無限にあるわけです」とありますが、なぜですか。簡単にまとめて説明しなさい。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

年が改まり、小正月も済んで、大寒を遣り過ごすと、ⓐ僅かに寒さが緩む。急行電車の乗客の厚着も少し控えめになり、満員時の閉塞感も心持ち軽減されるようになった。

「お急ぎのところ、誠に申し訳ございません。車両点検のため、今暫くお待ちください」

同じ車内アナウンスが、また繰り返されている。急行電車はいつもの信号待ちの位置で停止したまま動きだす気配もなかった。

（中略）

どの乗客の顔にも（　X　）が滲んでいる。何処かの駅に停車中ならホームに降りることも出来る。だが、①この場所ではどうしようもなかった。

車内がⓑフオンな空気に包まれる中、窓の外を気にしている男女が五人いた。

光子は線路脇の文化住宅を見つめたまま、心配のあまり、つい独り言を洩らす。

「ほんまにどないしたんやろか。今日も明かりが点いてへん……」

それに応じるように、隣りで吊り革を握っていた真理絵がぽつんと呟いた。

「ほんと。今日でもう二日になる」

途端、光子はハッとして、首を捩って隣りの見知らぬ女性を見た。

「あ、済みません、私ったら、つい……」

隣人の独り言に反応してしまった気まずさで、真理絵は仄かに赤面する。

ふたりの様子に黙っていられず、浩輔は光子のすぐ脇から声をかけた。

「あの部屋でしょう？」

「②あそこですよね？」

真理絵の隣りで吊り革を握っていた隆一も、少し身を屈めて窓の外を真っ直ぐに指差した。

夜の闇の中で、線路脇の古い文化住宅は黒々としたシルエットを見せている。厚いカーテン越しに各戸の明かりが洩れているが、二階の真ん中の部屋だけは真っ暗なままだ。

「ええ、そうです」

「そうです、あの部屋です」

光子と真理絵は声を揃えた。

丁度、③四人の前の座席に股を広げて座っていた翔太は、首を捩って背後を確認し、意外そうな声を

上げた。
「何や、あの夫婦のこと気にかけてたんは、俺だけと違うかったんか」
その言葉に四人は揃って、驚いた顔で翔太のことをまじまじと見た。
目の前に年寄りが立っていても席を譲ろうともせず、大股開きでふんぞり返っている彼のことを、四人とも、乗車した時からあまり快くは思っていなかった。

（中略）

真理絵が戸惑いながらも、口を開いた。
「この急行電車の中で、ほぼ毎日、あの部屋を眺めていました。向こうは私を知らないけれど、私にとっては家族みたいに思えて」
光子が④共感の眼差しを向ける。
「ええ、ええ。ようわかりますよ。私も毎晩、あのおふたりのご様子を見せて頂いて、随分と慰められています」
「おでん、好きやんね、あのふたり」
漸く膝を閉じた翔太が、会話に割り込んだ。
「知らん？　三角に切ったコンニャクみたいなん、よう食べてるし」

両の指で三角の形を作ってみせる翔太は、今風な若者のイメージと異なり、無邪気でさえあった。
「あれは『蕎麦ばった』ですよ」
浩輔はつい、大きな声で応えていた。
「蕎麦ばった？」
翔太を始め四人が声を合わせて、怪訝そうな顔をしている。
「そう、蕎麦ばった」
浩輔は深く頷いて、懐かしそうな眼差しを窓の外に向けた。
「蕎麦生地を三角に切って茹でただけのものですが、茄でたてのアツアツに大根の搾り汁をかけて食べると、身体が芯から温もってねえ。郷里の秋田でももう滅多にお目にかかれなくなったのに、よもや車窓で見かけるとは」
もしかしたら、あの夫婦も秋田の出身かも知れない、と皆はそれぞれ胸の内で思った。
それにしても、と隆一はひとり[redacted]。
「どうして部屋を丸見えのままにしているんでしょうか。関西の風習なんですか？」
「んなアホな」
隆一の疑問は、翔太の無礼な突っ込みであっさり

否定された。
光子は隆一に柔らかく微笑みかける。
「この歳になって、ようようわかることなんですけどね、一人暮らしの老いの身では、もしも何かあった時に気付いてもらわれへんのが一番怖いんですよ」
光子の言葉に、皆の表情に不安の影が差した。
昔のように隣り近所との関わりが（　Y　）ならば、そんな心配は要らない。また、たとえば警備会社とⓒケイヤクできる財力があるなら、緊急事態にも対応できるだろう。倹しい暮らし向きの老夫婦が、もしものことを考えてカーテンを引かないでいたのだとしたら・・・・・。
「どちらかがご病気かしら」
真理絵が暗い顔で言えば、
「三日前は、ふたりともお元気でしたよ」
と、隆一が慰める口調で応えた。
「けど、年寄りって突然具合が悪なるもんやんか」
空気も読まずに翔太が言い、残る四人は一斉にこの若輩者を睨んだ。そのムッとした視線に翔太はさすがに狼狽え、ぽりぽりと人差し指で頭を掻き、
⑤「ええと、その・・・・・スンマセン」
と、詫びた。

皆がまだ非難がましい眼差しを座席の翔太に向ける中で、ふっと視線を上げたのは浩輔だった。
「あっ、明かりが」
浩輔の声に、四人はハッと窓の外に目を向ける。
件の部屋から眩い光が溢れていた。
「ああ、電灯が新しなって・・・・・」
光子が目ざとく見つけて、指し示す。
真新しい照明器具の下、電気屋と思しき男が脚立を畳んでいる。老妻は嬉しそうに手を合わせて明かりを見上げ、夫は薄い財布から紙幣を抜き出していた。
「前のが故障して、電気屋さんも直ぐには来てくれなかったのね、きっと」
真理絵はホッと胸を撫で下ろす。
「良かった、ふたりともお元気そうですね」
隆一は安堵の息を吐いた。
光子と浩輔は視線を交えて頷き合う。
「ばんざ〜い」
翔太が調子外れな声を上げ、両の腕を高々と上げた。
四人は一瞬、ぽかんと翔太を見下ろしたが、声を揃えてわっと朗笑した。

漸（ようや）く車体がゴトンと大きく揺れて、⑥他の乗客からも歓声が上がった。翔太を含め五人は大いに笑ったあと、本を開いたり、携帯電話を取り出したり、思い思いの世界に入った。それぞれに言葉は交わさないけれど、⑦五人の間には妙にくすぐったい、和やかな雰囲気が漂っている。

（高田郁（かおる）『ふるさと銀河線　軌道春秋』より一部改変）

問一　═線ⓐ～ⓒについて、漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して書きなさい。

問二　本文の［なかっ］と文法的に同じ意味・用法の「ない」を含む文を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ　急にそんな話をされても訳が分からない。

い　作業した後なので手がきたない。

う　ここはそんなに狭くはない。

え　もうこれ以上走れない。

問三　（　X　）と（　Y　）に入る言葉として、ふさわしいものを、それぞれ次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

X　**あ**　興奮とためらい　**い**　期待と安らぎ　**う**　緊張と緩和　**え**　疲れといらだち

Y　**あ**　疎　**い**　密　**う**　雑　**え**　急

問四　═線①「この場所」とありますが、急行電車はどこに止まっているのですか。本文から抜き出して答えなさい。

問五　═線②「あそこ」とありますが、

Ⅰ　どこのことを指していますか。その場所について説明した次の文の（**あ**）～（**う**）に当てはまる言葉を、本文からそれぞれ抜き出しなさい。ただし、**あ**は十字で、**い**は六字で、**う**は九字で抜き出すこととします。

（　**あ**　）の（　**い**　）になっている（　**う**　）のこと。

Ⅱ　何を心配しているのですか。答えなさい。

問六　――線③「四人」とありますが、この四人のうち、明らかに関西出身ではない人物を二人、答えなさい。

問七　――線④「共感の眼差しを向ける」とありますが、何を「共感」していたのですか。説明しなさい。

問八　□に入る慣用句としてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ　首をかしげる　　**い**　首をすくめる

う　首を突っ込む　　**え**　首を長くする

問九　――線⑤「『ええと、その……スンマセン』と詫びた」とありますが、どのような行為に対して、「詫びた」のですか。説明しなさい。

問十　――線⑥「他の乗客からも歓声が上がった」とありますが、なぜ「歓声が上がった」のですか。説明しなさい。

問十一　――線⑦「五人の間には妙にくすぐったい、和やかな雰囲気が漂っている」とありますが、どのような感情だったのですか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ　日頃はたまに会話を交わす程度であった五人が、老夫婦のことについて多くの会話を交わし、その会話を通して互いの距離感が縮まった充実感。

い　以前衝突した五人が、老夫婦のことがきっかけで会話を交わし、その口論の原因が解消され、互いに主張していた問題点も解決したことによる納得感。

う　ずっと悩まされていた困難から解放され、そのおかげで、車内全員の客はもちろんであるが、特にこの五人が強く解き放たれた思いを持った安心感。

え　日頃は会話を交わすこともない五人が、老夫婦のことがきっかけで会話を交わし、その不安点が解消され、互いの距離感が縮まった幸福感。